

VR 医学教育の COVID-19 感染拡大状況下での応用 とコロナ後の発展

鄭敬楓(Cheng, Ching-Feng)

仏教慈濟医療財団法人台北慈濟医院 副院長

【要旨】

未来の医学教育はどう変わるのだろうか？

我々は臨床教員の教えをどのようにサポートし、その上学生に効果的に学んでもらうため、どうすれば良いのだろうか？

台北慈濟医院の鄭敬楓副院長は、バーチャルリアリティ(VR, Virtual Reality)による医学教育の高度化及び台北慈濟医院「COVID-19 VR 医学シミュレーショントレーニングセンター」の新型コロナ肺炎との戦いにおける VR 応用方法、そしてコロナ後の時代における VR は、どのように医学教育に変革をもたらすのかについて講演する。

VR はゲームだけに応用されるのではなく、専門的な医学トレーニングにも応用可能だ。VR の没入感、インタラクティブ性、想像力といった特性により、医学トレーニングは一変する。医療従事者は感染の心配をせずに、安全な環境下で、トレーニングを終えてから現場に出て患者のケアに当たることで、貴重な医療用防護具などのリソースはトレーニングによる消耗が低減され、様々なフィールドで自主学習ができる。感染状況の変化に応じて、臨床教員はカスタマイズされた VR 教育計画を運用でき、インタラクティブな方法でのケアトレーニングのアレンジにより、学生は自主学習も可能となり、臨床教員の教育負担とコストが大きく低減する。VR による没入型

の状況学習 (Immersive Learning) とマッスルメモリー (Muscle Memory) という学習の特性を結び付けることで、リアルなケア状況を再現し、駆け出しの医療従事者がいずれもケアについての学習成果を迅速かつ効果的に高められるようになるのだ。